



鶴田町農事普及だより

(7月号 令和8年7月1日～7月31日)

〈発行〉

鶴田町／鶴田町農業振興課
鶴田町農業支援センター
つがるにいきた農業協同組合
鶴翔統括支店
西北農林水産事務所
農業普及振興室

狩猟免許取得費等助成事業のご案内

鶴田町鳥獣被害対策協議会で、狩猟免許等の取得に係る経費の一部を助成します！

助成額：経費の2分の1以内
(1人：上限50,000円)

※予算が無くなり次第受付を終了いたします。

＊申請方法＊

講習会受講及び銃購入の前に印鑑を持参のうえ、

下記窓口まで申請してください。

※助成内容の詳細については下記担当までお問合せください。

〈問い合わせ先〉

鶴田町役場 農業振興課 生産振興係
TEL：0173-22-2111 (内292・297)

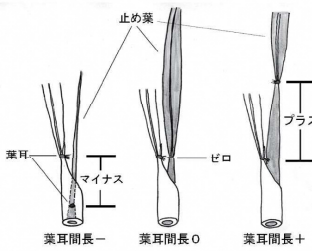
農業経営収入保険の 保険料助成率引上げについて

町では、「農業経営収入保険」への加入を促進し、農業者の経営安定と負担を軽減するため保険料に係る支援をしておりますが、一層の加入促進を図るため、令和8年度より、保険料の助成率を次のとおり引き上げることを決定しております。この機会に農業経営収入保険への加入をご検討ください！

●新規加入：50% ●継続加入：30%
(引上げ前は一律10%)

★収入保険制度とは…オールリスクに対応できる保険です。農業者が保険期間に生産・販売する農産物の収入全体を対象として、収入が基準収入の9割(補償限度)を下回った場合に、下回った額の9割(支払率)を補てんする制度です。加入するためには、青色申告をしていることが条件です。

図一 葉耳間長の見方



葉耳間長の見方(松島省三による)

- 幼穂形成期●
 - 出穂前25日頃
 - 主茎の幼穂長2mm頃
- 穂ばらみ期●
 - 出穂前11～20日頃
 - 主茎の葉耳間長が12から14cm頃

《ツキノワグマ出没警報発令中!!》

(4月20日～11月30日)

農作業は、1人での作業を避け、「ラジオやクマよけスプレーを携帯する」、「食べ物や空の容器はすぐに片付ける」、「農作業残渣は適正に処理する」など、人身被害の防止に努めましょう。

《6～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です》

農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に
十分気をつけましょう。

- 使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

《農作業中の熱中症に注意しましょう》

～熱中症は適切な予防をすれば防ぐことができます～

- 天候の変化が激しい時期ですが、高温が予想される日は、熱中症予防を忘れないようにご注意ください。
- 暑さの感じ方は人によって異なります！高齢の方は特に注意が必要です。
- 周りが協力して、熱中症予防を呼びかけ合うことが大切です。

青の煌めきあおもり国スポ・障スポ
翔ける未来へ縄文の風に乗って
第80回国民スポーツ大会 第25回全国障害者スポーツ大会
国スポ本大会 2026年10月10日土～10月20日火
障スポ 2026年10月23日金～10月26日月

気象

(令和8年6月25日 仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報より)

向こう1か月の天候は、平年と同様に曇りや雨の日が多くなる見込みである。平均気温は、高い確率50%である。降水量は、少ない確率が40%である。

水稲

高温時は地温を下げて根の機能を維持しよう！
適正追肥で「おいしい米づくり」を進めよう！

1. 生育状況(6月20日現在)

「まっしぐら」は、平年と比較して、草丈はかなり短く、茎数は並で、葉数はやや少なく、生育の進捗は平年並である。「青天の霹靂」は、平年と比較して、草丈はかなり短く、茎数は大幅に少なく、葉数はやや少なく、生育の進捗は2日程度遅れている。「はれわた」は、平年と比較して、草丈はかなり短く、茎数はかなり多く、葉数はやや少なく、生育の進捗は1日程度遅れている。今後、平年並または低い気温が予想されることから、生育はほぼ平年並と見込まれる。

2. 水管理

(1) 分けつ盛期から穂首分化期(6月下旬～7月上旬) 1株当たり茎数を「まっしぐら」は「はれわた」は20本程度、「青天の霹靂」は18本程度(栽植株数が70株/坪程度の場合)確保した水田では、晴天で高温(平均気温20℃以上)が続くような時は中干しを行う。中干しには、窒素の過剰発現の抑制、草丈の伸びの抑制、根腐れ防止等の効果がある。中干しを行う場合は、田面が軽くひび割れが入る程度とし、排水不良の水田では2回くらい繰り返すと効果的である。ただし、生育が遅れている場合や低温が予想される場合は行わない。また、幼穂形成期までに必ず終える。

(2) 幼穂形成期から穂ばらみ期

農業の相談はこちらへ

農業についての各種相談を受け付けております。受付した内容は即時対応いたしますので、気軽にご相談ください。

鶴田町 農業支援センター
午前9時から午後5時
☎22-2111
(役場農業振興課)

- (注) 1 大豆粒大以降、展着剤は使用しない。
2 晩腐病の発生が多い圃地では、大豆粒大(7月上旬頃)にベンレート水和剤3,000倍を特別散布する。
3 ストロビリン単剤のアミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及び、同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビリン単剤は年1回以内の使用とする。
4 ハタニ類の発生が多い圃地ではマイトコーネフロアブル1,000倍又はカネマイトフロアブル1,000倍を特別散布する。
5 コガネムシ類の発生が7月下旬にみられる場合は、アグロスリン水和剤、アディオフロアブル、スミチオン水和剤40,800倍、ヨールフロアブル、テッパン液剤のいずれかを特別散布する。
6 ※スピノシン剤：ディアナWDG、デリゲートWDG

おとうとう 収穫適期を見極めてすぐ

1. 収穫(晩生種) 満開日から8日(10日)を目安に「農作物生産情報」(令和8年6月号参照)、着色、大きさ、形状、食味などを重視して成熟したものから順次すぐりもぎを行う。また、灰星病やオウゴンヨウモリバエ対策として、収穫前に有効な薬剤を特別散布する。ジュンハートの収穫始めの日には、「収穫適期判別カレンダー」(ジュンハート専用)を利用し、満開55日後頃を収穫始めとし、着色指数5に達した果実からすぐりもぎをする。満開60日後頃(収穫最盛期)以降は、着色指数4～5の果実を収穫する。指数6に達した果実は過熱で日持ちが悪く劣り、流通には不向きなので即売用等に向ける。なお、果皮色を判定する際は、着色が中庸の部分(最も濃い部分と薄い部分の中間の色)で行う。栽培環境や年次により果皮色と果実品質が合致しない場合があるため、収穫にあたっては必ず食味を確認するため総合的に判断する。また、着色むらが大きい果実はこの条件は適合しない(平成29年度指導参考資料、平成31年度普及する技術参照)。

2. 雨よけ被覆資材の除去 樹体に対する悪影響を避けるため、収穫後速やかに除去する。

3. 施肥(礼肥) 樹勢維持と花芽分化促進のため、収穫後できるだけ早く施肥する。施用量は年間施用量の20%程度とする。

《第Ⅱ-63図 カラーチャートを利用した果比色の判定イメージ》

4. 病害虫防除

■ 薬剤散布 (県おとうとう防除暦：佐藤錦の基準より抜粋)

散布時期	薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
7月中～下旬(収穫後)	オーソサイド水和剤80又はオキシラン水和剤600又はチウラム剤500	※ハタニ類の発生に合わせて、殺ダニ剤を使用する。

(注) 褐色せん孔病(せん孔病)やハタニ類が発生すると早期に落葉し、次年の花芽充実に影響するので、収穫後散布は必ず実施する。

「農事普及だより」及び「他の農作物生産情報等」は町ホームページにも掲載しております。



URL <http://www.town.tsuruta.lg.jp/kurashi/kurashi-nougyou/post-117.html>

5. 病害虫防除

■ 薬剤散布【農薬はぶどう園以外、ほかの作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

(スチューベン)

散布時期	薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
大豆粒大(7月中旬頃)	ジマンダイセン水和剤1,000倍又はアミスター10フロアブル1,000倍又はストロビードライフロアブル2,000倍又はホライズンドライフロアブル2,500倍	アグロスリン水和剤2,000倍又はアディオフロアブル1,500倍又はヨールフロアブル5,000倍又はテッパン液剤2,000倍又はスピノシン剤※10,000倍

(シャインマスカット)

散布時期	薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
大豆粒大(7月中旬頃)	アミスター10フロアブル1,000倍又はストロビードライフロアブル2,000倍又はホライズンドライフロアブル2,500倍	アグロスリン水和剤2,000倍又はアディオフロアブル1,500倍又はヨールフロアブル5,000倍又はテッパン液剤2,000倍

野薬 ◆トマト◆

高温対策を行い、草勢に応じた肥培管理と水分管理で品質向上に努めよう！

1. かん水と追肥 (1) かん水と追肥の間隔は毎日1日おきで実施する。(2) かん水は、水分要求量の高まる直前の午前8～10時頃に行う。(3) かん水量は1株当たり1.5リットルを基準とし、28℃以上の気温が予想される日は、1株当たり2リットルとする。(4) 30℃以上の高温が予想される日は、通常のかん水では水分不足となるため、午後にも1回、1株当たり1リットル程度の追加のかん水を行う。(5) 2本仕立て苗の場合は、1株当たりのかん水量は1本仕立て苗の2倍量とする。(6) 1回当たりの追肥量は、窒素成分0.5kg/10a以内とし、10日間の窒素成分の合計2.0kg/10aを目安とする。3日以上日照不足が続く場合は水量を1/2削減、肥料量を調整する。また、草勢に応じて追肥を調整する。

(早植えの作型 かん水と追肥量の目安) ()は2本仕立て苗

月	旬	かん水量／1株当	かん水間隔	10日間の窒素成分合計
7	上～下	1.5～2.2kg(3.0～4.4kg)	毎日～1日おき	2.0～2.5kg/10a

※りんか409はかん水量は1割程度多くする。

2. 葉面散布 草勢の維持や葉先枯れ、ガク枯れ、落花を予防するため、メリック20黄400倍を各段過2回程度、開花花房を中心に葉面散布する。
3. 高温対策 (1) 高温による各種障害が発生しやすい時期となるため、被覆遮光資材や塗布遮光資材等を活用してハウス内の温度をできるだけ下げる。(2) 終日遮光を行う場合の被覆資材の遮光率は、両面を遮光する場合10～25%、片面を遮光する場合30%前後が適する。
4. 病害虫防除 (1) 曇雨天が続くと灰色かび病や葉かび病が発生しやすくなるので、予防防除に努める。(2) 高温乾燥でアザミウマ類、アブラムシ類、オオタバコガ、トマトキバガの発生が多くなるので、早期発見・早期防除を徹底する。(3) 塗布遮光資材は、資材により効果の期間が異なるので、確認して使用する。塗布の際、西側の片面に露がない時間帯に南側または西側の片面に散布する。(4) 通路かん水を7月中旬頃から、おおむね7～10日間隔で行う。急激な吸水による軟果防止のため1回目は1,000倍/10aをかん水し、2～3日後から本格かん水と追肥を実施する。本格かん水の1回当たりのかん水量は3,000～4,000倍/10a程度、追肥は1回当たり窒素成分で0.5kg/10a程度とする。

■ 薬剤散布（県りんご防除暦より抜粋）

時期と散布量	主な対象病害虫	基準薬剤
7月初め (500% /10a)	斑点落葉病 ハダニ類 モモンクイガ キンモンボンガ	ビレスロイド剤 アントラコール顆粒水和剤 500倍 又はバスポート顆粒水和剤 1,000倍 又はオーソサイド水和剤 800倍
7月半ば (500% /10a)	斑点落葉病 褐斑病 ハダニ類 モモンクイガ リンゴコカクモンハマキ	アントラコール顆粒水和剤 500倍 又はバスポート顆粒水和剤 1,000倍 又はオーソサイド水和剤 800倍
7月末 (500% /10a)	斑点落葉病 褐斑病 キンモンボンガ ハダニ類 モモンクイガ	オーソサイド水和剤 800倍 又はアリエッティC水和剤 800倍 又はタイパワー水和剤 1,000倍

(注) 殺虫剤、殺ダニ剤は発生に応じて加用する。

■ リンゴハダニとナミハダニに対する殺ダニ剤の適用表

薬 剤 名	倍 数	使用時期	年間使用回数	リンゴハダニ	ナミハダニ
サンマイト水和剤	1,500倍	収穫21日前まで	1回	○	×
パロックフロアブル	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	○	×
カネマイトフロアブル	1,000倍	収穫7日前まで	1回	×	○
オマイト水和剤	750倍	収穫3日前まで	1回	○	×
コロマイト乳剤	1,000倍	収穫前日まで	1回	○	○
ダニサラバフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	×
スターマイトフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	×
ダニコングフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	×
エコマイト顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	×
ダニオーテフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	○

- ※1. サンマイトは落花直後に使用しない。
2. コロマイトは6月下旬までの使用を避ける。
3. オマイトは7月下旬までの使用を避ける。

■ カルシウム剤の使い方

資材名	散布時期（散布間隔）	資材形状	倍数	散布回数
スイカル	6月上旬～9月中旬（10日以上）	粉状	300倍	3～5
セルバイン	6月上旬～9月上旬（10日以上）	粉状	400倍	3～5
アグリメイト	6月上旬～9月中旬（15日以上）	液状	500倍	5

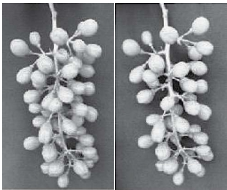
(注) 樹勢の弱い樹や高温時、あるいは干ばつ時には薬害発生（葉縁褐変）の恐れがあるので避ける。原則散布は単用で行う。

3. 摘 粒

(1) 摘粒の時期
果房を整え、粒揃いや果粒肥大を促進するため、満開後15～25日頃（7月中旬）から始め、果粒軟化期前（8月上旬）までに終える。

(2) 着粒数の目安
シャインマスカットは、大豆粒大（7mm程度）頃までに終える。

(3) シャインマスカットの摘粒方法
小粒果やさび果などの障害果のほか、果粒が外向きに並ぶように内側の果粒を除去し、1房に35～40粒程度に仕上げ、早すぎる摘粒は、収穫時に



2. 摘 房

新梢と果実との養分競合を少なくし品質向上と枝の充実を促すため、早めに行う。着房数は美とまりの状態や結果枝の葉数を見ながら調整する。
スチューベン及びキャンベル・アーリーでは、中庸～強い結果枝には2房、やや弱い結果枝には1房着房させるように調整し、弱い結果枝には成らせない。
シャインマスカットでは、中庸～強い結果枝には1房着房させるように調整し、弱い結果枝には成らせない。

1. スチューベンの果房整形

開花前の6月中旬に岐首を除去する。果粒が小豆粒大頃（果房中間の粒径が5mm程度の頃）に果房の先端を1cm程度切除するとともに、果房の長さが12～13cmになるように果房上部の支梗を切除する。さらに、果房の幅が6cm程度になるように長い支梗を切りつめる。

特産果樹
ぶどう

適期の房づくりで商品価値の高い果房に仕上げよう！

県生育観測ほの

スチューベン（鶴田町境）の生育は、開花日が平年より7日早い6月11日、満開日は平年より7日早い6月14日であった。7月は房づくりや病害虫防除などの作業を適期に行う。

りんご

結実状況に合わせて、早めに摘果を！
良果を見極め、仕上げ摘果に全力を！

6月1日現在県生育観測ほ（板柳町五幾形）のふじの果実肥大は、横径2.17cmで平年1.62cmを上回っている。

3. 追 肥
子実を充実させるため、開花期前後に追肥する。追肥量は、窒素成分5～8kg/10aであるが、生育状態に応じて加減し、生育が旺盛な場合は行わない。

(3) 畦間、株間処理
土壌処理、茎葉処理を行っても残草が多い場合は、畦間、株間処理除草剤が利用できる。薬剤の特性に合わせ効果的に利用する。
大豆に薬剤が付着すると薬害が発生するため、泡状ノスルやカバードで飛散しないよう散布する。

薬 剤	薬害の助長を防ぐための注意点
大豆バサグラン液剤	●高温時や大豆の生育が不良な場合は使用を避ける。 ●重複散布を避ける。
アタックシヨット乳剤	●大豆の生育が不良な場合は使用を避ける。 ●重複散布を避ける。 ●他の茎葉処理剤（イネ科対象剤を含む）と混用しない。
パワーガイザー液剤	●大豆本葉1葉期以降の処理は薬害程度が大きく、収量を抑制し、大豆による遮光効果が遅延する。

(2) 広葉適用除草剤の茎葉処理
広葉雑草に効果のある茎葉処理薬剤は大豆バサグラン液剤やアタックシヨット乳剤、パワーガイザー液剤がある。以下の注意点を確認のうえ使用する。また、薬剤により使用時期が異なるため注意する（パワーガイザー液剤は、一年生雑草に適用）。

2. 除 草
発生している雑草の種類、大きさ、大豆の生育状況に合わせて除草剤の効果的に使用する。
(1) イネ科選択性除草剤の茎葉散布
雑草が大きくなると効果が劣るので、各薬剤の使用時期の範囲内で使用する。

供給を高める、などの効果がある。
1回目には本葉2～3葉期に行い、初生葉のつけ根まで軽く土寄せする。2回目には本葉5～6葉期に行い、第1葉のつけ根まで土寄せする。
最終土は、開花10日前（7月20日頃）に終える。培土の高さは、コンバイン収穫時に支障がない程度とする。

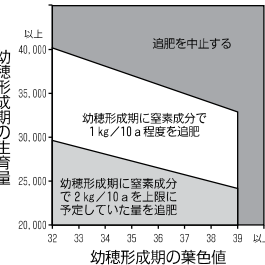
3. 追 肥
幼穂形成期に達し、肥料が切れて葉色が淡くなっている追肥の適期である。
「はれわたり」「まっしぐら」は幼穂形成期後10日までに葉色が淡くなったことを確認できた場合は追肥を実施するが、「青天の霹靂」は幼穂形成期以降の追肥は行わない。適期外の追肥は玄米タンパク質含有率を高めて食味低下の原因となるため、「青天の霹靂」追肥判断力「ラスケール」等を用いて、適切な追肥量を見極める。

	暖かい日	寒 い 日	備 考
幼穂形成期から10日間	水深10cm程度		●稲の吸水量が多く、低温や干ばつに弱い時期（幼穂形成期から穂ばらみ期） ●気温の高低に関係なく水深10cmで10日間の「幼穂形成期深水かんがい」を実施する。 ●この時期の低温は、粒数の減少、糊粉の発生、障害不稔の原因になる。
穂ばらみ期	水深4cm程度（浅水） 時々水の入換え	15～20cm（深水）	●最も低温に弱い時期 ●平均気温20℃以下、最低気温17℃以下になると予想される場合は、可能な限り深水にして幼穂を保護する。 ●高温時は、4cm程度の浅水にし、時々水の入換えを行い、根の老化を防止する（この頃から根の機能が低下し始める）。

■ 「青天の霹靂」の幼穂形成期における栄養診断基準

(1) 斑点米カメムシ類
水田周辺の休耕田や畦畔・農道等の雑草地に生息しているため、雑草が開花・結実しないよう草刈りや耕起をこまめに行う。なお草刈りには出穂1週間前までに終了する。
水稲の出穂以降に草刈りをする必要がある場合は、斑点米カメムシ類に効果のある殺虫剤を水田に散布した後、速やかに行う。
ノビエ、シズバネ、クログワイの多発田では、水稲の出穂前から斑点米カメムシ類が水田内に誘引され、斑点米率が高くなるので、除草や防除を徹底する。

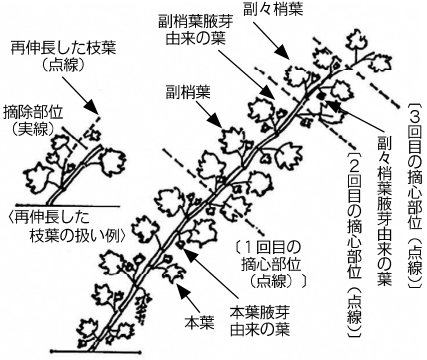
(2) 葉いもち
葉いもちの初発生は、近年、6月末から7月上旬に確認されている。早期発見・早期防除が基本であり、発生状況に十分注意し、発生を確認したら直ちに防除を行う。
(3) 穂こうじ病
穂ばらみ期の低温や日照不足、多雨で発生しやすくなる。
土壌伝染性病害であるため、前年発生した水田では必ず防除を行う。
銅剤の効果が高く、防除適期は出穂20日前～10日前であり、防除時期が遅れると、防除効果の低下や薬害の恐れがあるので注意する。



(注) 幼穂形成期の生育量は
草丈×㎡当たり茎数で
算出、葉色値は葉緑素計で測定。

町農業委員会では、年3回農地パトロールを実施し、遊休農地や、散乱園等の発生防止に取り組んでいます。
農地の貸借や売買については、町農業委員会へご相談ください。

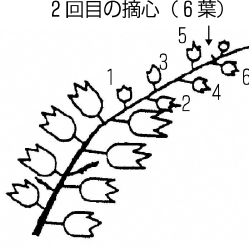




《シャインマスカットの結果枝葉残し方の例》

(2) シャインマスカット
2回目の摘心は、副梢葉が8～9枚程度展葉した頃に5枚残して摘み取る。
3回目の摘心は、副々梢葉が5枚程度展葉した頃に3枚残して摘み取る。
本葉、副梢葉、副々梢葉の腋芽由来の葉と再伸長した枝葉（点線）を摘み取る。

スチューベンの摘心方法



4. 2回目以降の摘心

スチューベン

2回目の摘心は、副梢の展葉枚数が8～9枚になった頃に行う。1回目の摘心後に伸びた副梢を5～6枚を残して摘心する。摘心部位の先端の副々梢だけを残して、他はすべて摘除する。

小粒未熟果が混入しやすくなるので留意する。

トツジンM
オイルベースト

QRコード1
QRコード2
QRコード3

泥巻き法

(1) 腐らん病、褐斑病
本年も腐らん病の発生が見られている。摘果後のつる（果柄）から侵入・感染するので、果台につるが残らないようにする。枝腐らん病は、見つけ次第切り取り、適切に処分する。胴腐らん病は、処置が不十分であったり、誤った処置が行われている園地もみられるので、再発病斑を含め、削り取り法か泥巻き法いずれかの処置を適切に行う。左のQRコードより動画でそれぞれの治療方法を確認できる。胴腐らん病の発病が著しい樹は、伝染源になるので積極的に伐採し、速やかに園外へ搬出する。

4. 病害虫防除
7月以降の散布は15日間隔となるが、斑点落葉病やモモンクイガ、ハダニ類の増加期に入るので、発生動向に十分注意するとともに、散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

3. マメコバチの集箱の回収と管理
本年も前年同様、管内全域でマメコバチの数が少ない傾向があった。適切に管理し、マメコバチの増殖を促す。
マメコバチを天敵から守るため、集箱は雨が着る7月上旬ごろに回収し、できる限り涼しい小屋の軒下などにまとめて保管する。この場合、ネズミの被害や雨水の跳ね返り避けるため、地面からできるだけ離す。また、箱の積み重ねや雨やけにも配慮し、集箱の内部が過湿にならないよう注意する。

2. 袋 かけ

ふじは、有袋にすることにより、つる割れの軽減や着色の向上、収穫期の分散ができるほか、販売戦略上も重要であるため、経営状況に配慮しながら、有袋栽培にも積極的に取り組む。7月10日頃までに袋かけ作業を終えるようにする。
また、すす病対策として、袋かけ前の薬剤散布が重要なため、果実にも十分薬液が付着するように留意し、散布後5日以上間隔が空く場合は、有効な薬剤で実洗いをしてから袋かけを行う。

1. 摘果の見直し

良品生産に向け、一通り仕上げ摘果を終了した園地では、再度園地を見回り、摘果の見落としがないか、障害果や小玉果等の品質不良果がないか点検する。なお、標準着果量が中心果で確保できない場合は、側果の中から形質の良い果実を残したり、障害の程度をよく見極めて障害の程度が軽い果実を残して、標準着果量を確保する。